採し耕したが、私は主に石積みを請合ったので、栗石、小石などを拾い集めた。石斧はその中にあった訳である。

礫の中でも、人工的に手を加えたものは容易に見分けがつくものである。打製石斧ならおそらく見落していたと思う。石斧には、私が発見した日付の一九五四年十一月十二日を記入している。

祖父の話では、山の八合目にある大岩には穴があったと言っているが定かではない。

石斧発見後はそのまま私が保管しているが、近年になって、町史や文化財関係の資料編さん、中学校の歴史資料や展示品として役立ってきた。直接私が専門家から鑑定してもらったことはないが、畑野浦の冨沢泰が、何人かの識者に見てもらったそうである。

氏が人から聞いた話によると、佐賀県背振山地の産ではないかとのことであった。南郡の海岸地帯で発見された石斧が、打製か磨製か同一石質かしらないが、遠い佐賀県の背振山からどうして連絡を取り合ったものか疑問でならない。なお、石斧発見地帯より二〇メートルぐらいの所で植林中、弥生土器の小片も出土したこともつけ加えておきたい。

表紙解説

層搭

層搭とは仏舎利を安置するインドの仏搭と、中国の楼閣建築とが結びついた形式のものです。石造層搭はその屋根の数によって、三重・五重・七重・九重・十三重搭と呼び、奇数が原則です。二層から上の軸部は下の屋根からわずかに作り出された程度に比較的薄いものと、別石を用いた厚いものとがある。前者を多層搭、後者を多重搭と区別することもあるが、一般に三重搭・五重搭・九重搭と呼んでいる。

構造形式は、基壇・基礎を置き軸部を立て、屋根、軸部と積み重ね、最上の屋根の上に露盤・覆鉢・相輪・宝珠と積むのが普通であるが、中には変形搭もある。

この層搭は臼杵市深田にある。総高三七五センチメートル、材質凝灰岩、基礎は壇上積形式で二面に格狭間を刻む。軸部には蓮華座上に月輪を彫り、中に金剛界四仏の種字を薬研彫りし、縁に正和四年乙卯（一三一五）願主阿闍梨隆尊・合力作者阿闍利円秀の刻銘がある。